

# 山姥と三人の娘

解説

東京女高師附屬幼稚園

この話はあの有名な「七匹の仔山羊」に大層よく似て居ります。我が國にも、あれを全く同じ構想のものに作られた話が、所謂日本童話として昔から傳へられてゐたのでした。これが近ごろ作られた話ならば、たゞ眞似ごまゝして何の興味もありませんが、日本昔話として傳へられて來てゐるのですから、單に、よく似てゐるだけで、かたづけられないやうな氣もいたします。世界各國の童話の問題としていろいろの考察が生れてくるを考へられますが。然しそれは又その方面の研究として、こゝには年長組の談話材料として、この話を御紹介したいと思ひます。但し、グリムの方は、動いてゐるのがみな動物、即ち山羊であつたり、狼であつたりするので、幼い子供にまつては怖ろしい感じが起りません。食べられてしまつた云つても話として客觀視してゐられる點が、童話として上乘でありませう。ところが、此の方になりますと、人間が動いてゐるので、すべての點が、子供にまつてあまりに近き事柄を身に感じますから、怖ろしい感じはこゝによる前のよりは深いかと思ひます。この點、大人から考へて残酷であつたり、子供に恐怖を起させそうな懸念のこゝろは幾分改作しておきましたが、それにしても、この子は斯う、この子は斯うと、一人一人の子供の精神生活をよく知つてからこの子ももう大丈夫、この位の話をして懸念が無いといふ見透しがついてから、この話是用ふべきでありませう。

幼稚園でも年長組になるまで、他愛の無い話では、きいてはゐて呉れますが、この子の顔にも呆氣ない云つた氣配が見えて、今度は喜ぶ話を探して見ようを考へずにはゐられなくなります。羅生門なごも随分躊躇してゐましたが

面白がりこそすれ、心配はいりませんでしたから、この位の話は却つてよろしいかと思つて、こゝに御紹介いたしたわけでございます。(新庄)

\* \* \*

野原の真中に一軒家がありました。

この一軒家には、お母さんと一緒に月子、雪子、花子といふ三人の姉妹が住んでゐて、みんなで、毎日島に出て働いて暮して居りました。

或る日のこゝ、お母さんは急に御用が出来て、遠いゝ所に買物に行かなければならなくなりました。そこでお母さんは子供達にきいて見ました。

「お母さんはね、これから町の方へ出かけて來ますが、三人でお留守番が出来るかしら。」

「えゝ出來ますよ。」

「遠いから、今夜はおそくなるかも知れませんか。」

「えゝ、大丈夫よ。」

「ではみんなで仲よくお留守番をしていらつしやいよ、お戸棚にお菓子もあるし、晩のおかずも出來てゐるから

ね」

「では行つていらつしやい。」

お母さんは、風ろしきを持つて出かけて行きました。しばらく行つてから、あはてゝ又歸つて來ました。

「あのね、忘れてゐたこゝがある。この山奥に、こはい山姥が居るでせう。」

「えゝ、時々出てくるつて云ふんでせう。」

「さうさう、その山姥がね、若しかするに、お母さんの留守にやつて來るかも知れないの。」

「あら怖いわ。」

三人は思はずお母さんに飛びついてしまひました。お母さんは笑ひながら

「なアゝに大丈夫よ、山姥はさても聲が太くてざら聲ですよ、細いきれいな聲だつたらお母さんなの。」

「では聲が細くてきれいだつたら戸をあけませうね。」

「でもね、すぐあけてはいけません、手をよく見るんで

すよ、手がざら／＼してゐたら、山姥ですからね」

「さうだわ、お母さんの手はつる／＼してゐるんですけどね」

「では、お聲が綺麗で、手がつる／＼してゐたら戸を開けませうね」

「では月子姉さん、よく氣をつけて下さいね」。お母さんはかう云つて、町に買物に出かけて行きました。みんなは、お母さんの姿が見えなくなる迄お見送りしてから、家にはいつて、戸をピシヤリ閉めて、三人でお話をしてゐました。

「山姥なんて、ほんまに來るでせうか」

「來たつて大丈夫よ、聲が太くて、手がざら／＼してゐたら、この戸をあけなけりやいゝんですもの」

その中お山の方から、山姥がのそ／＼出て來て、この軒家の近くに來ました。そして、一寸のぞいて見たら、

お母さんが居ないようです。山姥は、

「あゝ、子供ばかりでいゝ鹽梅だ、お母さんの眞似をして、一つ、はいり込んでやませう」

ミ云ひ乍ら戸を／＼たゞいて

「お母さんが歸つて來ましたよ、早く戸をおあけなさい」  
ミ太い／＼／＼で云ひました。

「あらお母さんが歸つて來たようよ、でも聲が太いからきつミ山姥かも知れない。もし／＼お前さんは、山姥ですよ、お母さんの聲は、鈴のようにきれいな聲ですよ」

山姥はこれはしまつたミ思つて、近くの竹藪に出かけて行つて、笹の葉つばにたまつてゐる露を集めて、それをなめてゐました。これで聲がすつかり綺麗になりました。そうして又出かけて行つて、

「お母さんが歸つて來ましたよ、早く戸をあけて下さい」  
ミ優しい聲でいひました。

「あらほんまのお母さんよ」

ミ云ひましたが、お姉さんの月子さんが、

「ほんまのお母さんなら、手を一寸出して見せて御覽」  
ミ云ひました。山姥はうっかりニウツミ手を出しました

が、月子さんが見るミ、毛だらけで、ざら／＼してゐるではありませんか。

「あら、お前はやつぱり山姥ぢやないの、お母さんの手

はつるくしてゐるのよ。」云ひました。山姥は又しくじつたと思ひましたが、いろく考へて、畠に行きました。そして、お芋の葉つばを一枚ちぎつて、片方の手をく

るりこ上手に包みました。そして、出来るだけ優しい聲で、

「お母さんが歸つて来ましたよ。早く戸を開けてお呉れ」

三人の女の子は

「手を見せて御覽」

云ひましたからぬつこ手を出しました。今度はつるつるしてゐましたので、三人共大喜びで、

「あら、お母さんだく」。云つて戸をあけました。山

姥は、いきなり家の中に飛び込んで、三人を捕へようこしました。月子と雪子は、やつこ逃げ出したのですが、花子だけ、たうく捕つてしまひました。

「やれく、やつこ捕つた、たつた一人だけき仕方がない。

あんまりお腹が空いてゐるから食べてゐるひまは無い」

こ一口にバクリミ呑み込んでしまひました。逃げて行つた月子と雪子は、ぎんく駆け出して、井戸の側に来ました。そこに大きな木があつたので、物置から、鎌を持つて

来て枝にひつかけく二人は夢中になつて、この木に登つてかくれてゐました。

「あら、花ちゃんが居ないわ」

「さうしたんでせう」

「山姥に捕つたかも知れない、さうしたらいゝでせう」

木の所で、二人で大變心配してゐました。山姥は、花子のをのんでから、まだ外に居た筈だと思つて、家の中を探したのですが、見つかりません。外に出て探してゐるこ、井戸が居る子供のかげが井戸にうつりました。山姥は怖い顔して

「お前達は、さうして、その木に登つたんだ」

こ睨みつけました。月子さんは、りかうですからすぐに

「油をかぶりかぶり登つたんですよ、さうして御覽」

云ひました。山姥は、すぐに油壺を探して来て、油をかぶりく、木に登り始めました。けれど、油ではぢきに上つてしまひますから、山姥は、一足かけるこ、ズドン地面にすべつて落つこちてしまひます。又立ちよつて登りかけるこ、油が上つて、つるくこころげ落ちてしまつて

さうしても木には登れません。何度もくお尻もちをついて、しまひました。山姥は、始めて、だまされたき氣がついて、大變おこり出しました。

「お前達は、よくも私をだましたナ。ほんこの事をお云ひ。云はなげりや木を伐り倒して、二人も食べてしまふよ」。ミ大怒りににらみつきました。するこ、月子が止めるのもきかないで、雪子は、びつくりしてしまつたので

「ちや、ほんこの事を云ふから、木を伐るのは止めておくれ、鎌をひつかけく登つたのよ」

ミ云つてしまひました。山姥は

「なるほご、さうかい、それはいゝ考へだ」

ミ云つて、大きな鎌を物置から取つて来て、木の枝にかけては登り、かけては登りして、段々二人に近くなつて来ました。二人はもう怖くてく、ぶるくふるえて、二人で、木にしがみついてゐました。もうぢき届きそうになりましたから、月子は夢中になつて、手を合せて、拜み乍ら

「天の神様、さうぞお助け下さい。鎖を下ろして下さいませ」。ミお願ひしました。下からは山姥が毛だらけの

手をのばして、今にも月子ミ雪子の足をつかまうしまししたら、急に雷光がピカツミ光つて、山姥の目はぐらくミしました。するミ忽ち一筋の丈夫な鎖が天から下りて來ましたので、二人は大喜びで、その鎖にミびつきました。これを見て、山姥はもう一息きで、二人を捕へるミころを、さり逃がしましたので、口惜しそつに見つめて居ました。そして山姥も眞似をして、

「天の神様、さうぞ私にも鎖を下ろして下さいませ」

ミお願ひしました。するミ又一筋の鎖が天から降りて來ました。山姥は大よろこびで、鎖にミびつきますミ、鎖はずんく上へくミ上つて行きました。

ミころが、山姥の鎖は本當の鎖では無くて、腐れ繩でしたからたまりません。上に上つて行く途中でプツツミ切れてしまつたからたまりません。山姥はすつてんころりんミ地面に尻もちをついて、おちてしまひました。其拍子に、今迄丸のみにしてゐた花子さんが、ピョンミ飛び出しました。之を見て喜んだ月子さん雪子さんもやがて上の方から降りて来て、三人揃つて、お家に歸る事が出來ました。